
君と私の境界線

スペックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の境界線

【Nコード】

N5677Z

【作者名】

スペックス

【あらすじ】

世界が滅ぶ。それを聞かされた人達は、何を思い、どう動くのか。最初は小さな抗いでも、何時かは大きな道になると信じ、彼らはひたすらに前へと進む。愚か者と呼ぶには善人で、善人と呼ぶには愚か者で。そんな俺が、彼らにしてやれることは。そして、大馬鹿者の変質者に付いていこうと思ったのは何でだったんだろうか。

帰宅者の挨拶（前書き）

何を思い帰ってきたのか、それは誰にも分からない（配点・道筋）

帰宅者の挨拶

青々とした空の下。陽光が降り注ぐ中、庭で対峙する一組の男女。漆黒の髪に瞳、整った顔立ちをした軽装の男。詞恩は黒髪ポニーテールの女。本多・二代に対して長年の相棒である斧槍を構え、二代の出方を待っていた。極東・三河警護隊の正装に身を包む彼女は、右半身の姿勢で状態を低くし穂先が下を向くよう、右手を前に、左手は後ろに構えている。

槍の銘は蜻蛉切。東国無双、本多・忠勝の相棒であり、大罪武装ロイズモイ・オフロの試作品、神格武装だ。能力は刃に映した対象の名前を結び、割断する。上位駆動では、事象すら割断する事が可能である。

それを振るう二代は、忠勝の娘だ。故にこの状況下では、普段は忠勝が所持、使用する蜻蛉切を彼女が使っている事は不思議ではない。これは早朝訓練。蜻蛉切を使うのが普段からであり、そして

一切合切容赦無しの死合をしようとしているのだから。

十

詞恩は斧槍を片手で持ち、穂先を振り上げられるように柄の根元近くを握っていた。本来、斧槍とは切る、突く、叩く、薙ぐ、払う等の攻撃手段を穂先と穂先と柄の接合部にある斧の部分で状況に応じて使い分ける。

しかし、その持ち方はリーチの有利をなくしどちらかと言えば剣としての使い方だ。何故、彼が斧槍のリーチの長さを利用しないか。

それは相対する二代の加速術式にあった。

翔翼自体は累積加速型だけど、発動直後が必ずしも遅い訳じゃないんだよなあ……………俺の飛燕は瞬間加速型で一瞬なら上回るけど持続力ないから無駄だし。

長物の弱点は懐に入られる事だ。速度に分がある二代を前に、リーチの有利を持ったとして意味はない。さらに言うなら、蜻蛉切の柄は伸縮機構を持っているのでリーチの有利などないにも等しい。故に、懐に入られても対処出来るように根元近くを持っている。

……………近接格闘術だけなら、負けるきはしないけど。速いからなあ、二代は。

ふとネガティブな思考になりかけたのを感じ、はじまる前から負けるのを前提に考えるのは愚者の考えかと、思考を二代の事だけ、そして勝つことだけを考えるようシフトする。

静寂。お互いに動かず、お互いに視線を逸らさず、お互いに相手の事だけを考える。それは一枚の絵のように、まるでそこだけが別空間のように。

「……………行くで御座るっ！」

そして、沈黙は破られた。

仕掛けたのは二代だ。足元に神道系の鳥居型表示枠が展開され、瞬く間に彼女を高速の世界へと連れていく。彼が彼女と最後に死合ったのは三河から旅にでる前日。その時よりも、速く、鋭く、繊細になった加速術式・翔翼を持って彼女は迫る。

知覚出来ない速さに入られる前にケリつけるしかないか……！

既に視覚が働く範囲内に彼女はいない。しかし、知覚出来ない訳ではない。見えなくても、知覚出来ているのなら対処の仕方はある。左横から足を狙った突き。短期決着のつもりだろう、足を潰し動けなくするつもりだ。それに対し、詞恩は斧槍の穂先で突きを体の前にずらし、左足を軸に回転。そのまま勢いを止めずに右足で回し蹴りを放つ。が、既に二代はそこにおらず。突きをずらされた瞬間に更に前へと加速し、彼の背後を通過。勢いを殺さないよう上体を寝かせ、そのまま下半身に捻りを加え中空に飛ばした。

結果、見事な一回転捻りを見せた彼女は直ぐ様加速し彼の正面に移動。移動中に穂先を正面に回転させ連撃を放つ。突きから払い、払いから降り下ろし、跳ね上げ、突き、また降り下ろす。

連撃に対し、詞恩は斧槍の持ち方を変え対処する。片手で持っていた斧槍を空いている右手を柄の後ろに添え、ただ振るのではなく、回転運動を加え遠心力を得た一撃で弾いていく。臂力自体は詞恩が上だ。例え、二代が基本加護による身体強化がなされていてもアドバンテージは彼にある。

力強く弾き、そこに一撃を通していく。しかし二代は、それを逆に利用し弾かれた勢いそのまま穂先だけではなく石突も用いて攻撃してくる。

腕上げたな……！！

口元が緩み弧を描く。楽しくてしょうがない。面白くてしょうがない。今、この時間が永遠に続けばいいとすら詞恩は感じていた。だがしかし、それは出来ない。今のままでは、間違いなく自分は負けるだろう。累積加速型である翔翼はまだ生きており、攻撃も多方向からのほぼ同時攻撃に変わってきている。捌ききれなくなるのは時間の問題だ。

だが、諦めはない。二代のように足元に表示枠を出現させた彼女は彼女と同じ舞台へと登った。

十

来たで御座るなっ！

詞恩の加速術式・飛燕。それは二代の翔翼が楔事によって加速の邪魔になる不純を取り除いていくのに対し、瞬間的に使用者を高速の世界へと飛ばす事ができる。しかし、翔翼と違い発動時には必ず所定の動作が必要になる。

己の目の前にある空間を切り払う必要があり申すっ！

加速術式・飛燕は、燕をイメージしたものだ。空気を裂いて飛ぶように、目の前の空間を裂く動作が必要不可欠。それは眼前の空間を仮想の加速力場へと変換すると同時に不純を一瞬で取り除くのだ。結果、使用者はその身を一気に最高速へと持っていける。

だが、当然欠点もある。一つ、切り払う動作が行われなかった、もしくは妨害された場合、飛燕は発動しない。一つ、最高速へと持っていかれた後は、徐々に速度を失う。一つ、内燃排気の消費が大きい。一つ、最高速への到達が一瞬で行われるが制御が難しい。一つ、勢いが緩むと速度が激減する。

飛燕に対して、二代自身が感じた事や詞恩が自分で言っていた事を纏めるとこのようになる。最高速自体は確かに速い。翔翼の累積加速をもって、何れ程持続させれば同等の速度へ到達出来るか。

……しかし、やはりまだ最高速内での戦闘はなれて御座らぬっ………！。

二代の視覚に詞恩は映らない。しかし、先ほどの彼同様知覚は出来る。腕を、脚を、腹を、胸を、頭を、首を。翔翼を保ちながら、振るわれる斧槍へ蜻蛉切を払う。同時に、次へ現れ攻撃に適した位置へと蜻蛉切を突く。

金属音、そして確実に脚を止めたその攻撃により詞恩の飛燕が効力を失う。

二代は攻撃をやめない。翔翼による累積加速は彼女を更なる速さに導く。更に、蜻蛉切自体にも翔翼をかけ攻撃速度を速めた。

………！！

残像が生まれ、詞恩の上下左右から無数の突きが放たれた。

「断て、絶刀」

刹那、二代は体が吹き飛ばされるのを感じた。

庭で繰り広げられる激戦を、本多家の自動人形である鹿角は静観していた。一応、立会人という立場で二人の死合に関与してはいるが、特に彼女が二人の勝敗を決める訳ではない。死合の幕引き、結果も二人が決めることなのだから。

……ぶっちゃけ暇ですね。まあ、詞恩様の実力が見れたので良かったのですが。

三河から旅に出てかれこれ一年。手紙を寄越した翌日に帰ってきた彼は、その中身に帰るなんて言葉を一字も書いてなかった。そして帰っての第一声が「地球は青かった」である。

二代様が怒ってこうなつたはもはや自業自得ですね。

しかし、と。眼前で決着のついた二人を見て鹿角は思う。一年前、彼が持つ斧槍　神剣・絶刀は彼の呼び掛けに応答することはなかった。通常駆動である、刃に映した限定空間内へ自身が受けた痛みを衝撃波として打ち出す送還能力。先程、二代が吹き飛ばされたのはそれであろう。実際に鹿角も見るのは始めてだが、中々に癖が強いと感じた。

痛みというのは物理的、身体的ではなく恐らく大部分を感情が占めているでしょう。ですが、詞恩様の性格を考慮すれば戦闘中の高

揚とした心情においてそれは真逆でしかありませんね。

詞恩の戦闘から神剣・絶刀を解析していた鹿角の側に何故か二代を胸の辺りで横抱きに、お姫様抱っこした彼がいた。

「気配の消し方　いえ、周囲への気配同化も様になっているとお見受けします。忍者の類とお会いに？」

「Jud・色々あったからな。後一応和解したんで何か食べ物をお恵んでください」

「後二時間十四分二十五秒お待ちください。夕食の支度も済んでおりませんまで」

「夕食までお預けなの俺？」

「Jud・躰は大事ですから」

「ペットか俺は」

「ペットならばまだ可愛い気があるのですが」

「……………最近、親父と扱いが似てきてね？」

「Jud・妥当と判断出来ます」

「……………拙者、いつまでこうしておればいいので御座るか……………」

「俺の気が済むまで」

「安定のシスコンですね。悪いところはお変わりなきようで」

「否定はしない」

「せ、拙者は詞恩はそのままでもいいと思つぞ？」

「二代が可愛すぎて死ねるんだけどどうしよう」

「Jud・後始末はお任せを」

「遠回しに死んでいいと言われたぞ俺!？」

「さて、夕食の準備を始めますので後程」

「スルーきたー」

いまだ二代を抱き抱える詞恩に一礼し、鹿角は本多家の食堂へと向かう。後ろでは詞恩が二代を苛めているのが聞こえるが仲良き二人に構うことはしない。今の最優先事項は夕食の支度なのだから。

今晚は、何時もの倍は作らなければなりませんね。

献立を考えながら、鹿角は食堂へと姿を消した。

主人公設定（前書き）

ネタバレ若干含みます

主人公設定

名前【詞恩・】

年齢【18】

性別【男】

所属【武蔵アリアダスト教導院】

武装【神剣・絶刀】

性格【クーデレ・シスコン】

備考【両親死去。本多家身元保証人。称号あり。本多・二代の義兄。名を教えない。ポケ担当】

考察【五歳の頃、不慮の事故で両親が死去し、両親の知り合いである本多・忠勝が本多家に連れ帰った。その際、忠勝から真実を告げられ絶望し、幼き二代に救われる。結果、当時から年齢にそぐわない口調や思考をするようになった。忠勝、鹿角に鍛えられ二代と同等の実力を持つがそれだけでは足りないと感じた彼は置き手紙だけ残し各地へ旅に。実は武蔵に乗り込み三河から姿を消した時期があり、その際、現在の三年梅組の皆と接触。浅間神社に世話になっていたので浅間・智には色々と話してしまっているのが弱い。二代を溺愛しているせいか、スキンシップが激しい。本名を知るのは忠勝と松平・元信だけ】

ヒロイン

本多・二代

【お兄ちゃん大好き！この一言に限る。詞恩が武蔵に乗り込み姿を消した時や、旅に出た時などずっと探し回り鹿角に叱られ終わる】

浅間・智

【依存系巫女。若干病んでない？いいえ、ドスン巫女の標準装備です】

ヒロイン増えるか未定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677z/>

君と私の境界線

2011年12月19日00時46分発行